

浜松の中小8社 課題語る

県内初 経産省が交流キャラバン



交流キャラバンで意見を発表する中
小企業の経営者ら＝浜松市中区で

中小企業の経営者が直面する課題について語る経済産業省の「ぞいさな企業」交流キャラバンが二十九日、浜松市中区のアクトシティ浜松で開かれた。製造業や小売業を中心に市内の八社が現状を発表し、人手不足解消や販路開拓、

事業承継に向けた施策の充実を訴えた。輸送用機器の金属部品製造や機械部品の試作を手掛けるアツミ工業(西区)の渥美友茂代表取締役は「人材育成や確保が一番の課題」と吐露。学生のインターンを受け入れても採用に

結び付かないといい、「新しい仕事をこなすためには、外国人を採用している」と実情を語った。

「製品が人の目に触れる機会がもっとあれば」と求めたのは、ピアックス(中区)の小原林太郎社長。ピアンの表面を装飾する鏡面仕上げの技術を生かし、高級感のある特注家具やキッチン塗装に力を入れていて「海外を含め、販路を広げるための支援をしてほしい」と願った。

遠州綿紬の企画販売を行うぬくもり工房(浜北区)の大高旭代表取締役は、取引先の織物職人が自宅の敷地内で作業をしているため「高齢化しても、身内以外の人に継いでもらうのは難しいと聞く」と説明。「引退するタイミングで機材や技術を継承できる環境づくりが必要」と指摘した。キャラバンは経産省が二〇一五年度から全国各地で

企画し、静岡県内での開催は初めて。この日は中小企業庁の安藤久佳長官や関東経済産業局の後藤収局長ら十七人が出席して意見を交わした。(久下悠一郎)